

令和6年度版 小学校道徳「きみが いちばん ひかるとき」のご使用にあたって、令和2年度版からの掲載学年の変更により、以下の教材が前の学年での既習教材と重複することになります。

移行措置資料（指導者用資料／児童用差し替え教材）をご用意いたしましたので、誠に恐れ入りますが、適宜ご活用くださいますようお願い申し上げます。

06版 光村図書	移行措置	理由
2年 P.64 ～ P.66 「14 やめなさいよ」	「ぼんたとかんた」に差し替える。	02版 光村図書 1年に「やめなさいよ」が掲載されており、教材が重複するため。

ぼんたと かんた

【内容項目】A 善悪の判断、自律、自由と責任 【主題名】よく ないと おもったら

ねらい

迷いながらも、よくない誘いを断るぼんたの姿などを通して、よくないことをしないためにはどうすればいいのかを考えさせ、よいことを進んで行おうとする判断力を育てる。

ねらいとする道徳的価値について

物事の善悪についての的確に判断し、自らが正しいと信ずるところに従って主体的に行動することに関する内容項目である。

低学年のこの時期に、人として行ってよいことと、行ってはいけないことを、正確に区別することは、容易ではない。ただし、複雑な判断はできなくても、自分や友達の安全を最優先することや、そのために普段から注意されていることなどは大切にしなければならない。したがって、どんなに仲のよい友達の誘いであっても、それがよくないことであるならば、きっぱりと従わない判断をする必要がある。行ってよ

いことと、行ってはいけないことの判断を積み重ねることが、人間的な成長につながっていく。

授業の導入とてびきの分析

授業の導入

して いいことか、しないほうが いいことかを まよったことは、あるかな。

善悪の判断を迷った経験を想起させることで、日常生活と本時の学習を結び付ける投げかけである。つい、好奇心に負けてしまった経験を思い起こさせるとよい。児童が経験を想起できない場合は、「○○しようと友達に誘われて、迷ったことはないかな。」などと問うことで、授業

への関心を高めてもよい。

考えよう・話し合おう

よくないことを しないためには、どうすればよいのでしょうか。

この1時間を通して考えていく学びのテーマとして、児童に投げかける。この時期の児童にも、「よくないことは、してはいけない。」という意識はある。しかし、時に間違った判断や行動をすることもあるのはどうしてか、また、そうならないためにはどうすればよいのかを考えていくことを意識づけたい。

●**ずんずん** 歩いていく **かんた**を見て、**ぼんた**は、**どんな気持ちに** なったでしょう。

ぼんたの心の迷いを考えさせる発問である。考えさせるにあたっては、まず、入ってはいけないと注意されている裏山に行ってみたいと思う気持ちを、ついもってしまうことに共感させ、そのうえで、ぼんたの迷いを考えさせる。「裏山は、危ないから入ってはいけない。」という気持ちと、「かんたと秘密基地で遊びたい。」という気持ちの葛藤を捉えさせたい。

●**ぼんた**は、**どうして** 「**ぼくは、行かないよ。**」と **言った**のでしょうか。

「してはいけないことはしない。」と決断したぼんたの気持ちを考えさせる発問である。

ぼんたは、決断するまでにしばらく迷ったが、それでも「行かない」と決め、かんたにそれを告げている。その姿を捉えさせ、思いつきの言動ではないことを意識させたい。そのうえで、かんたの誘いに心が揺れたぼんたが、「行かない」と言い切る理由を考えさせる。

児童からは、「裏山は危ないから。」「入ってはいけないと言われているから。」など、教材に書かれていることがそのまま挙がってくる可能性がある。その際には、役割演技を取り入れた指導も考えられる。教師がかんた役になって、ぼんた役の児童を「裏山へ行こう。」と誘い、自由に返答させると、児童の経験に基づいた発言が出てくるだろう。あるいは、教材にあると

おりに誘いを断るぼんたを演じさせ、どんな気持ちで演じたか、また、どんな気持ちになったかを尋ねてもよい。

また、必要に応じて、裏山には行かないと決めたぼんたとかんたが、にっこり笑ってうなづく姿に着目させてもよい。よいと思ったことをすることや、よくないと思ったことをしないことの気持ちよさに気づくきっかけにもなるだろう。

●**自分で考えて** **きめたことは、ありますか。**
それは、どんなことですか。

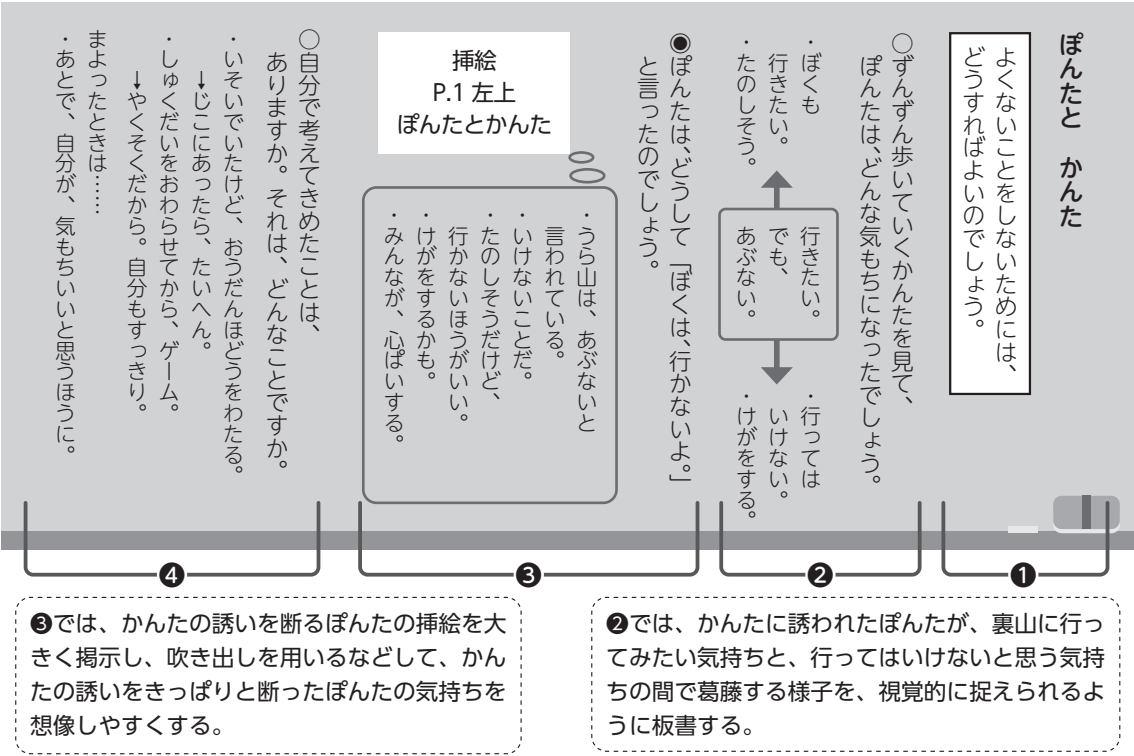
教材を通して考えてきたことをもとに、自分の経験を問う発問である。ぼんたのように、迷ったときに自分でしっかり考えて決めた経験が出された場合は、どうしてそれができたのか、できたときの気分はどうだったかななどをきき、クラス全員で共有する。

また、自分で考えて決めた経験が出ない場合も想定し、「これから、していいか、いけないかを迷ったときには、どうしたいか。」といった補助発問も用意しておく。自分で考えて決めたという経験が思いつかなくても、これから自分がどうしたいかを考えることで、ぼんたの行為の意味を自分なりに自覚できるようにする。

授業の展開例

	学習活動（主な発問と予想される児童の反応）	指導上の留意点
1	▶善悪の判断に迷った経験がないかを振り返る。 ○していいことか、しないほうがいいことかを迷ったことは、ありますか。 ・早く道を渡りたくて、横断歩道ではないところで渡ってしまった。 ・ゲームをしたくて、お父さんのスマートフォンを勝手に使ってしまった。 考えよう・話し合おう よくないことを しないためには、どうすれば よいのでしょうか。	・あらかじめ幾つかの場면을提示して考えさせてもよい。（フェンスを乗り越える、勝手に入っはいけない部屋に入るなど。） ・児童から出た例を使って、これらのことを友達に誘われたらどうかと問うてもよい。
2	▶「ぼんたと かんた」を読んで、話し合う。 ①「ずんずん歩いていくかんたを見て、ぼんたは、どんな気持ちになったでしょう。」 ・僕も行きたいな。秘密基地って、楽しそう。 ・行かないほうがいい。けがをしたら大変だ。 ・裏山は危ないといわれているから、入ってはいけない。でも、秘密基地には行ってみたい。 ・かんたは友達だから、行かないとは言いにくいな。 ・かんたがいっしょなら、行ってもいいかな。でも……。 中心的な発問 ②「ぼんたは、どうして『ぼくは、いけないよ。』と言ったのでしょうか。」 ・裏山は危ない。入ってはいけないといわれているから。 ・裏山に入るのは、いけないことだから。 ・秘密基地は楽しそうだけど、裏山は危ないから、入らないようにと言われている。そういう場所には、行かないほうがいい。 ・裏山で、僕もかんたも、けがをすることも。 ・裏山に行ったら、みんなが心配するかもしれない。 ③「自分で考えて決めたことは、ありますか。それは、どんなことですか。」 ・近道をしたかったけど、きちんと横断歩道のところまで行って、道を渡った。事故で大けがをしたら大変だから。 ・ゲームをしたかったけど、先に宿題を終わらせた。お父さんとの約束だし、そのほうが自分もすっきりするから。 ・もし、してよいか、いけないかを迷ったら、後で自分が気持ちいいと思うほうを選びたい。	・ぼんたが、ずんずん歩いて行くかんたを見ている挿絵を提示する。 ・かんたの誘いに、善悪の判断で揺れるぼんたの心の内を捉えさせる。 ・してはいけないと知りつつも、ついしたくなってしまうことがあることに共感させたいので、話し合うようにする。 主体的な学び ぼんたに自我関与して考えられるよう、役割演技を行ってもよい。教師がかんた役となり、児童を「裏山へ行こう。」と誘って、自由に返答させる。「行かない。」と答えた児童には、その理由を発表させる。 対話的な学び 考えがまとまらない児童に対しては、ペアやグループで考えることを促したり、クラス全員で体験を共有したりして、自分にも似たような体験がないかを想起させる。 ・考えるのが難しい場合は、「これから、してよいか、いけないかを迷ったときに、どうしたいか。」を尋ね、ぼんたの行為の意味を自分なりに自覚できるようにする。
3	▶本時の学びを振り返る。 ○今日の学びを振り返りましょう。	・教科書の巻末「学びのきろく」に、「学びのきろくシール」から、当てはまるものを選んで貼るように促す。

板書計画



評価の視点

本時の指導の中心は、よくないことをしないためにはどうすればいいのかを考えさせることである。そのために、「ぼんたは、どうして『ぼくは、いけないよ。』と言ったのでしょうか。」と、善悪の判断を行った際のぼんたの気持ちを中心的な発問として投げかけている。最も重視すべき評価の視点は、児童がぼんたに自我関与して、「よいことと悪いことの区別をし、よいと思うことを進んで行うために大切な思いについて考えているか」ということになる。

こうした学習状況を把握する主な方法としては、中心的な発問に対する児童の発言やペアやグループによる話し合い状況、役割演技での発言の把握などが挙げられる。

道徳科の特質から見た、その他の評価の視点

- ◆**道徳的価値の理解**：よいことと悪いことの区別をし、よいと思ったことを進んで行うことのよさについて、考えている。
- ◆**自己を見つめる**：自分の行いを振り返って、正しいと思う行動ができているか、自己を見つめている。
- ◆**多面的・多角的に考える**：正しいことを行う気持ちのよさと難しさの両面から、自分が正しいと思うことを行うことのよさについて考えている。
- ◆**自己の生き方について考える**：善悪を主体的に判断し、正しいことを進んで行うために、自分はどうしての考えを深める いきたいかについて考えている。

令和6年度版 小学校道徳「きみが いちばん ひかるとき」のご使用にあたって、令和2年度版からの掲載学年の変更により、以下の教材が前の学年での既習教材と重複することになります。

移行措置資料（指導者用資料／児童用差し替え教材）をご用意いたしましたので、誠に恐れ入りますが、適宜ご活用くださいますようお願い申し上げます。

06版 光村図書	移行措置	理由
2年 P.102～P.105 「23 くりの み」	「ぐみの木と小鳥」に差し替える。	02版 光村図書 1年に「くりの み」が掲載されており、教材が重複するため。

ぐみの木と小鳥

【内容項目】B 親切、思いやり 【主題名】あいてを思いやって

ねらい

病気のりすに、嵐の中でもぐみの実を届ける小鳥の姿を通して、親切にしたりされたりすると、どんな気持ちになるかについて考えさせ、身近にいる人に温かい心で接し、親切にしようとする心情を育てる。

ねらいとする道徳的価値について

自分のことばかりを考えたり、自分の思いだけを主張したりしては、望ましい人間関係は築けない。よりよい人間関係を築くためには、相手に対する思いやりや、相手の立場に立った親切な言動が不可欠である。相手の立場を考えたり、相手の気持ちを想像したりすることを通して、思いやりや親切な行為の価値を実感できるようにしていきたい。

特にこの時期は、身近にいる人に温かい心で接し、自分にできることを精いっぱいしようとする気持ちを育てることが大切である。

授業の導入とてびきの分析

授業の導入

こまっている人が いたら、あなたは、どうするかな。

児童の実生活の中から、困っている人と接した場面を想起させ、そのとき、自分はどうするかを問いかけている。おそらく、「助けてあげる」「優しくしてあげる」「親切にしてあげる」などの答えが、容易に出てくるだろう。ここでは「親切」という言葉がキーワードになるが、「親切」の意味を捉えにくいときには、教師側から意味を伝え、「考えよう・話し合おう」の学びのテーマに向かわせるようにする。

ここで、「困っている人」の状況例を挙げる場合、安易に「道に迷っている人がいたらどうするか」などとすることは、子供が事件に巻き込まれるケースにつながる恐れがあるので、避けるようにする。

考えよう・話し合おう

親切にしたり、されたりすると、どんな気持ちになるでしょう。

親切にしたり、されたりしたら、どんな気持ちになるのか、親切な行為をした側、親切な行為を受けた側の両面から考えるめあてとなっている。親切にしたり、親切にされたりすると、どんな気持ちになるかを考えさせ、自分の身近にいる人に温かい心で接し、親切にしようとする心情を育てたい。

●やみそうもない あらしの中で、小鳥は、どんなことを じっと 考えていたでしょう。

この発問をする前に、小鳥がぐみの実を運ぶことになった経緯を、挿絵を提示しながら、児童全員と確認しておく。ぐみの木がりすを心配していたこと、小鳥が様子を見に行くとりすが病気で寝ていたこと、持っていったぐみの実を食べると「おかげで、だいぶ よくなりました。」と言ってくれたことなどを押さえ、こうした状況の中、小鳥はどんなことを思っていたのかを考えさせていく。

りすのことを考え「行きたい」という気持ちと、嵐だから「行けない」という二つの気持ちで揺れている小鳥の心情を想像させる。

一つは、りすのことを考えて、「りすさんはきっと待っているだろうな」「りすさんが心配だ」「ぐみの実を食べたらもっと元気になるかもしれない」という「行きたい」という思い。

もう一つは、「嵐の中を飛んでいったら、危ないかもしれない」「りすさんは少し元気になっていたから、無理しなくてもいいかもしれない」「ぐみの木さんも『嵐がやんでからにしてください。』と言っていたから、行かないほうがいい」という「行けない」という思い。

こうした相反する思いが葛藤する中、それで

も最後は「力をふりしぼってとびつづけた」小鳥の、りすに対する強い思いに気づかせたい。

また、「小鳥さん、ありがとう。」とりすに言われたときの小鳥の気持ちを想像することで、親切にしたときの気持ちを考えることにつなげたい。

●友だちや、まわりの人に 親切にしたとき、どんな気持ちに なりましたか。

小鳥と同じように親切にしたときのことを思い出し、そのとき、どんな気持ちになったのかを振り返らせ、親切にすることのよさに気づかせる発問である。教材からの学びを、自分自身の生活と結び付けて考えさせたい。親切にした経験と併せて、そのときの気持ちを話し合わせる。友達の経験を聞き合うことで、多様な気持ちのありように気づかせたい。

●この後、りすが、小鳥に手紙を書きました。あなたも、りすになったつもりで 書きましょう。

りすの立場になって、小鳥の思いやりの気持ちに気づかせるとともに、親切にされるとどんな気持ちになるのかを考えさせる活動である。この活動を通し、親切にされるとうれしい気持ちになることなどに気づかせたい。

活動の前には、嵐の中に飛び立ち、地面にたたきつけられそうになりながらも、力を振り絞ってりすの元に来てくれた小鳥の様子を振り返らせるようにする。

手紙を書いた後、グループで読み合う交流の時間を取ることで、親切にされるとどんな気持ちになるのか、考えを深められるようにしたい。

つなげよう

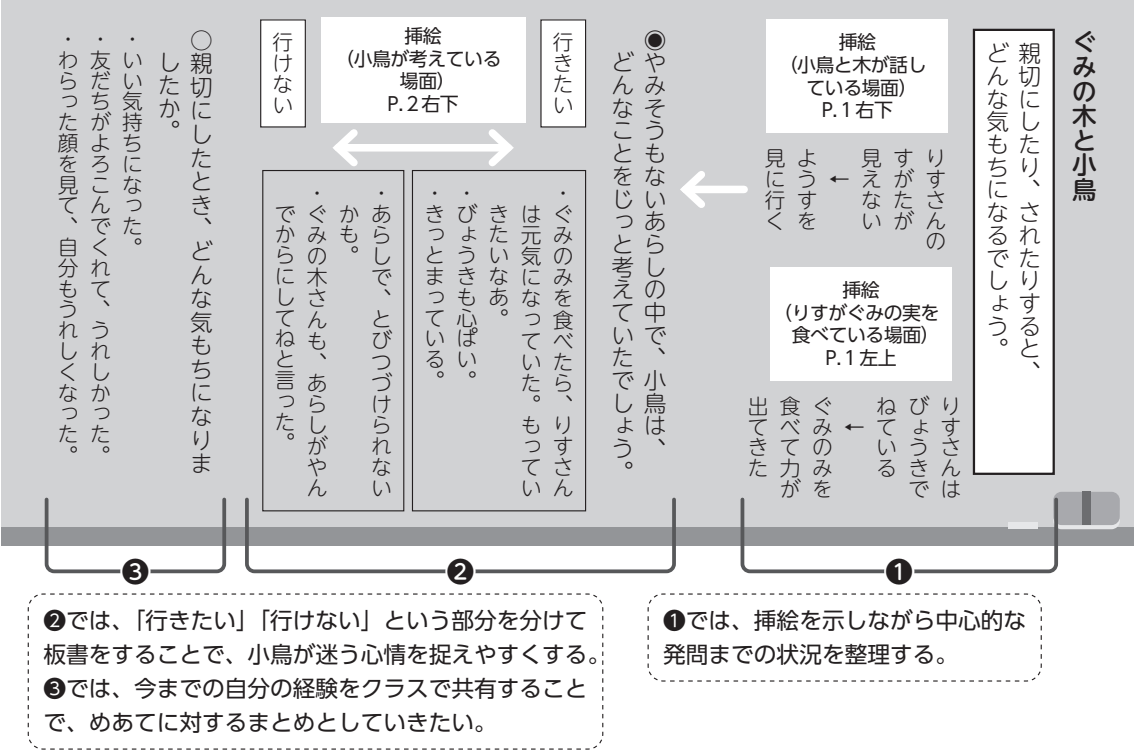
●一年生の子が ないているのを 見たら、あなたは、どんなことが できるかな。

本時で学んだことを、実際の生活の中で生かしていくことを促す投げかけである。クラスで話し合って考えていけるとよい。

授業の展開例

	学習活動（主な発問と予想される児童の反応）	指導上の留意点
1	▶困っている人がいたらどうするか、発表し合う。 ○困っている人がいたら、どうしますか。 ・助けてあげる。 ・声をかけてあげるよ。 ・親切にする。 考えよう・話し合おう 親切にしたり、されたりすると、どんな気持ちになるでしょう。	・自分の経験と結び付け、この後に提示するめあてを、自分のこととして捉えられるようにする。 ・「親切」という言葉の意味を教師側から伝え、めあてに向かわせてもよい。
2	▶「ぐみの木と小鳥」を読んで、話し合う。 中心的な発問 ①やみそもない嵐の中で、小鳥は、どんなことを、じっと考えていたのでしょうか。 〈行きたい〉 ・りすさんは、ぐみの実を食べて元気になっていたから、もっと持って行ってあげたいなあ。 ・「また明日ね。」と約束したから、りすさんは、ずっと待っているかもしれない。 ・嵐だから、りすさんはきっと一人で心細いだろう。病気も心配だし、どうしよう。 〈行けない〉 ・こんな嵐では、飛び続けることができないかもしれない。行かないほうがいいかな。 ・ぐみの木さんも、行かないほうがいいと言っていたな。 ②友達や周りの人に親切にしたとき、どんな気持ちになりましたか。 ・友達が喜んでくれて、すごくうれしかった。 ・「ありがとう。」と言われて、いい気持ちだった。 ・また次もやってあげようと思った。 ・友達の喜ぶ姿を見て、自分もうれしくなった。 ③この後、りすが、小鳥に手紙を書きました。あなたも、りすになったつもりで、手紙を書いてみましょう。 ・こんな嵐なのに、ぐみの実を届けてくれて、本当に心強かったよ。ありがとう。 ・小鳥さんのおかげで、元気になったよ。うれしくて、涙が出たよ。 ・寂しくて、病気でつらかったから、来てくれて本当にうれしかった。こんなにおいしいぐみの実を食べたことはなかったよ。	・中心的な発問の前に、小鳥がぐみの実を運ぶことになった経緯を整理しておく。特に、りすがぐみの実を食べたとき、力が出てきたことを押さえておく。 ・りすのことを考え、「行きたい」という思いと、嵐だから「行けない」という気持ちで悩んでいる、小鳥の心情を捉えさせる。 - 主体的な学び このような状況のとき、自分だったらどうするのかと想像させながら、小鳥の気持ちを考えさせる。補助発問として、小鳥が嵐の中、りすのところに行ったのはどうしてかを考えさせてもよい。 ・りすに「ありがとう。」と言われたときの小鳥の気持ちを押さえておく。 ・普段の生活を思い出させ、どんな親切をしたとき、どんな気持ちになったのかを振り返らせる。 ・友達の発表を聞き合い、親切にすることのよさに気づかせる。 ・りすの立場になって小鳥の思いやりの気持ちに気づかせるとともに、親切にされるとどんな気持ちになるかを考えさせる。 ・小鳥への感謝の気持ちや、小鳥が来てくれてどう思ったのかなどを書かせる。 - 対話的な学び グループで、お互いに手紙を見せ合う交流の時間を取り、親切にされると相手がどんな気持ちになるのかを共有しながら、考えを深め、広げるようにする。 ・「つなげよう」は、適宜活用する（本資料(2)ページ参照）。
3	▶本時の学びを振り返る。 ○今日の学びを振り返りましょう。	・教科書の巻末「まなびの きろく」に、「まなびの きろく シール」から、当てはまるものを選んで貼るように促す。

板書計画



評価の視点

本時の指導では、親切にしたりされたりすると、どんな気持ちになるかについて考えさせる。そのために、まずは、りすにぐみの実を届ける小鳥に自我関与させ、やみそもない嵐の中で、小鳥がどんなことをじっと考えていたかを問い、最後には、りすの立場から小鳥の思いやりについて考えさせている。最も重視すべき評価の視点は、「身近にいる人に温かい心で接し、親切にしようとするということについて考えているか」ということになる。

こうした学習状況を把握する主な方法としては、中心的な発問に対する児童の発言、発言に対する問い返しへの応答、ワークシートなどの記述、グループによる話し合いの状況の把握が挙げられる。

道徳科の特質から見た、その他の評価の視点

- ◆道徳的価値の理解 : 身近にいる人に思いやりの心をもって接することについて考えている。
- ◆自己を見つめる : 周りの人が困っていたらどうするかと、自分を見つめている。
- ◆多面的・多角的に考える : 親切にする側、親切にされる側の両方の立場から、相手を思いやり、親切にすることについて考えている。
- ◆自己の生き方について : 周りの人に温かい心で接するために、どんな気持ちを大切にしていこうかとの考えを深めると考えている。

令和6年度版 小学校道徳「きみが いちばん ひかるとき」のご使用にあたって、令和2年度版からの掲載学年の変更により、以下の教材が前の学年での既習教材と重複することになります。

移行措置資料（指導者用資料／児童用差し替え教材）をご用意いたしましたので、誠に恐れ入りますが、適宜ご活用くださいますようお願い申し上げます。

06版 光村図書	移行措置	理由
6年 P.174～P.178 「30 曲げわっぱから伝わるもの」	「ようこそ、菅島へ！」に差し替える。	02版 光村図書 5年に「曲げわっぱから伝わるもの」が掲載されており、教材が重複するため。

ようこそ、菅島へ！

【内容項目】C 伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度 【主題名】郷土を大切に

ねらい

訪れる人に、島のよさを伝えようとがんばる順平の姿などを通して、国や郷土を大切にする心について考えさせ、先人の努力を知り、国や郷土の自然や文化を大切にし、発展させていこうとする心情を育てる。

ねらいとする道徳的価値について

「郷土」は、自分の生まれ育った土地や地理的環境を指すだけでなく、その場所で過ごし、友人や家族、地域の人たちと共にさまざまな経験をしてつながりを深めていくなかで、「ふるさと」と表現されるような精神的意味合いを含んだものとなる。

この「ふるさと」としての郷土は、人生を送るうえで、心のよりどころとなり、支えともなるものである。郷土を愛する心を育むことが、育った地域をより発展させていきたいという態度にもつながっていく。

また、郷土には、長い歴史を通じて培われて

きた伝統や文化が存在する。貴重な文化資産を保護していくためにも、郷土を愛する心を養い、受け継がれてきた伝統や文化に関心をもち、次の世代へ伝えていこうとする態度を育てていくことが大切である。

授業の導入とてびきの分析

授業の導入

君が住んでいる地域のじまんは、何かな。

住んでいる地域の自慢できることを挙げさせることで、児童一人一人に、住んでいる地域のよさを自覚させる。事前に、教師が地域の名所や特産物などの写真を用意しておくことも、児

童の興味を喚起するのに効果的である。

考えよう・話し合おう

郷土を大切にする心について、考えよう。

1時間を通して考える学びのテーマである。郷土のよさや、郷土と自分との関わり等を思い浮かべながら、郷土の伝統や文化を大切にする心について考えさせたい。

●順平は、どんなことを考えながらガイドをしているのでしょうか。

自分の郷土を大切に思う、順平の気持ちを考えさせるための発問である。

ガイドの本番、菅島灯台の歴史を紹介すると、観光客からは驚きの声上がり、順平は誇らしい気持ちになった。順平もまた、菅島灯台に古い歴史があると知ったときは、観光客と同じように驚き、見慣れた灯台が違って見えてきたことを思い出す。その後、ガイドの準備をするときに見つけた島でいちばんお気に入りの景色を、観光客に見てほしいと思って紹介する。

順平はなぜ誇らしい気持ちになったのか、どうして灯台が違って見えてきたのか、お気に入りの景色を観光客に見てほしいと思ったのは、どんな気持ちからか、といった投げかけをもとに、順平の郷土への愛着と、郷土のよさを広めていきたいという気持ちを押さえる。

●順平は、どうして島の伝えたいことが後から後からあふれてきたのでしょうか。

島について調べ、観光客に紹介したことが観光客に好意的に受け止められた順平は、島の伝えたいことが後から後からあふれてきて、次はどんなことを紹介しようかと考えるようになった。活動を通して、順平の心の中に、郷土に対してどのような思いが生まれたのかを、考えさせる。

また、順平が伝えたいこととして挙げた例は、「お年寄りから子どもまで、みんなが生き生きしていること、海産物がおいしいこと」など、地域社会の在り方や産業にも広がっている。これらは、児童が自分の郷土のよさを振り返る際

のヒントにもなる。

●自分の生まれた所や住んでいる地域のよさやみりょくは、どんなところだと思いますか。

本時の学習を自分自身に引きつけて考える問いである。

一人一人が地域のよさや魅力を考えることを通して、郷土の伝統や文化を大切にし、それを発展させようという実感をもたせたい。導入で想起した地域の自慢を振り返らせたり、郷土の伝統や文化等の写真を提示したりするのも効果的だろう。

つなげよう

日本をおとずれた外国の人に、自分の住んでいる地域や日本のよさ、伝統や文化をしょうかいするなら、どんなところをしょうかいしたい？

教材を通して考えたことをもとに、郷土から日本へと範囲を広げ、そのよさを考えさせるための発問である。

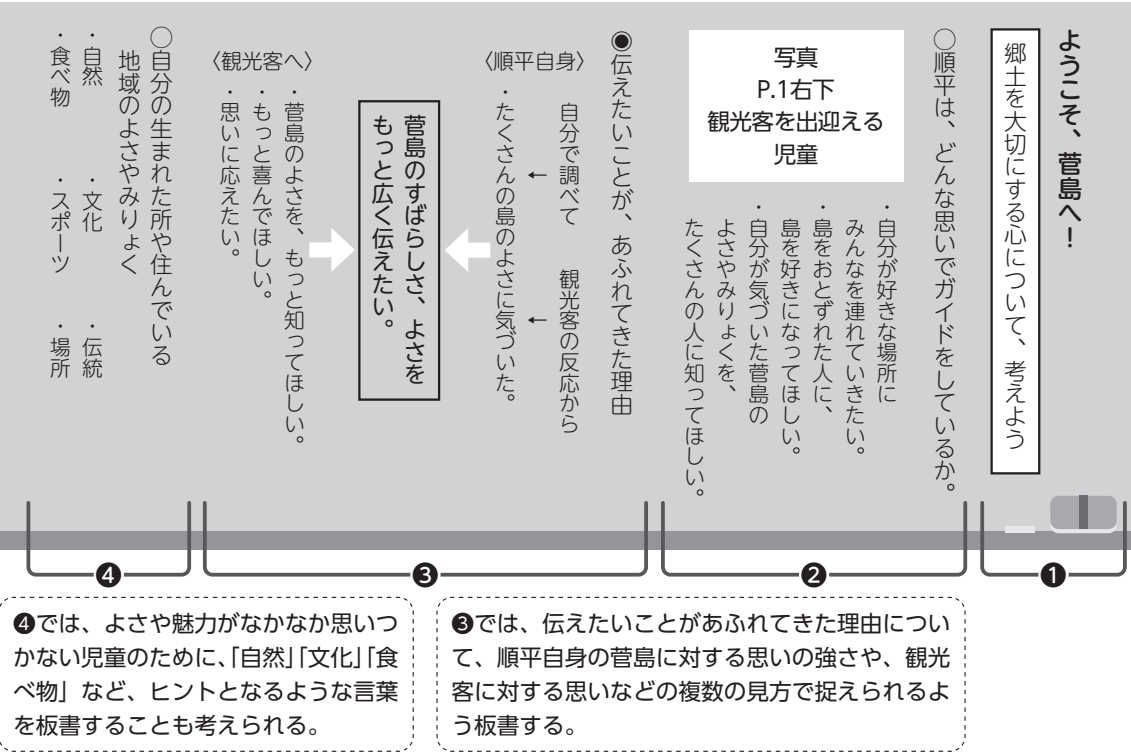
他の教育活動や現代的な課題等との関わり

- ・総合的な学習の時間
- ・特別活動（児童会活動）
- ・伝統文化教育

授業の展開例

	学習活動（主な発問と予想される児童の反応）	指導上の留意点
1	▶自分たちが住んでいる地域の自慢を発表する。 ○この地域の自慢は、何ですか。 ・200年以上も前から続くお祭りがあり、県外からも観光客が来る。 ・古い町並みが有名。 ----- ●考えよう・話し合おう 郷土を大切にする心について、考えよう。	・事前に、教師が地域の名所や特産物などの写真を用意しておくことも、児童の興味を喚起するのに効果的である。
2	▶「ようこそ、菅島へ！」を読んで、話し合う。 ①順平は、どんなことを考えながらガイドをしているのでしょうか。 ・自分が好きな場所にみんなを連れて行って、喜ばせたい。 ・この島のことを知ってほしいし、好きになってほしい。 ・自分が気づいた菅島のよさや魅力を、たくさんの人に広めたい。 ●中心的な発問 ②順平は、どうして島の伝えたいことが後から後からあふれてきたのでしょうか。 ・観光客に、島のよさをもっと知ってもらいたいと思ったから。 ・島のことをたくさん伝えれば、観光客がもっと喜んでくれると思ったから。 ・島のことをもっと知りたいという観光客の思いに応えたいと思ったから。 ・島のことを調べる中で、順平自身が、たくさんの島のよさに気づいたから。 ・観光客の反応を通して、島のよさを客観的に知ることができたから。 ・自分の郷土のすばらしさに気づき、そのよさをもっと広く伝えたいと思ったから。 ③自分の生まれた所や住んでいる地域のよさや魅力は、どんなところだと思いますか。 ・毎年開催される夏の花火大会。お盆で帰ってくる人たちの他に、遠くから大勢の観光客が訪れる。花火大会の準備や、終わった後の掃除も地域の人が協力して行っているのも、この町のいいところだなと感じる。	・灯台の歴史を知って驚いたことを通して、順平の中に、郷土への愛着や、そのよさを広めたいという気持ちが芽生えてきたことを確認する。 ・ガイドツアーの活動で、観光客が灯台の歴史に驚いてくれたことへのうれしい気持ちも踏まえて考えさせる。 ●対話的な学び それぞれが考えを書き出したら、4人程度のグループで、順番に発表させる。その後、グループでの話し合いの結果をクラス全体で共有し、純粋な島への思いや、観光客の反応を通して気づいたことなど、多様な見方に気づかせる。 ●主体的な学び 導入で考えた「地域の自慢」を振り返りながら、本時の学習を児童自身に引きつけて考えさせる。 ・よさや魅力がなかなか思いつかない児童のために、「自然」「文化」「食べ物」など、ヒントとなるようなキーワードを示すとよい。
3	▶「つなげよう」を読む。 ○日本を訪れた外国の人に、自分の住んでいる地域や日本のよさ、伝統や文化を紹介するとしたら、どんなところを紹介したいですか。 ▶本時の学びを振り返る。 ○今日の学びを振り返りましょう。	・「つなげよう」については、本資料(2)ページを参照。 ・教科書の巻末「学びの記録」の一言感想の欄に、考えたことを書くように促す。

板書計画



評価の視点

本時の指導では、「郷土を大切にする心」を考えさせることが中心となる。そこで、順平に自我関与させ、順平は、どうして島の伝えたいことが後から後からあふれてきたのかを中心的な発問で問うている。よって、最も重視すべき評価の視点は、「先人の努力を知り、郷土の自然や文化を大切にし、発展させていこうとすることについて考えているか。」ということになる。

こうした学習の状況を把握する主な方法としては、中心的な発問に対する児童の発言、発言に対する問い返しへの応答、ワークシートなどの記述、グループによる話し合いの状況の把握が挙げられる。

●**道徳科の特質から見た、その他の評価の視点**

- ◆**道徳的価値の理解** : 郷土には、長い歴史の中で培われてきた伝統と文化があり、そのよさを受け継いでいくことの大切さについて考えている。
- ◆**自己を見つめる** : 生まれ育ってきた郷土とその伝統や文化について、自分はどんな考えをもっているか、自分を見つめている。
- ◆**多面的・多角的に考える** : 友達の考えを聞き、自分の地域にあるさまざまなよさや魅力について考えている。
- ◆**自己の生き方について考える** : 自分自身が郷土とその伝統や文化の担い手であることを意識したうえで、自分にもできることはないかと考えている。